

みんなで語る原爆史

題字 中川 順

ローカルテレビ局の挑戦 原爆ドキュメンタリーシリーズ

小川 博 (HTV)

て少年僧になつた。あの少年僧はその後どのように生きてきたか。
取材を始めたが、少年僧は全国に散つており、みな口が重く語ろうとはしない。その中の一人には広島市に住む川井秀夫さん(当時34歳)がいた。お寺も壇家もない僧侶では生活していくしかない。高校を出ると警察予備隊に入り、自動車の運転技術を身につけてタクシーの運転手になつた。ふとした縁で澄子さん(当時33歳)と結婚、彼女も被爆者だったが原爆症による貧血に悩みながら長女純子ちゃん(当時4歳)を生み、ささやかながら幸せな一家を作っていた。

デイレクターの杉原萌とカメラマンの竹村峰信はいずれも新人、川井

62年)、広島では2局目、全国で45番目の民放としてスタートした。

施設は貧弱、人員は少ない典型的な

後発局だった。地元の広島はまだ原爆の悲劇から立ち直れず、被爆者の多くは原爆症の不安にさらされてい

た。この実情を国内はもとより国外へも訴えるため文部省主催の芸術祭

に舞台を借りた。原爆ドキュメンタ

リーシリーズの制作である。芸術祭

では奨励賞、優秀賞を9回受賞した。

これはまた“ローカル局には番組制作はむづかしい”という民放界へのチャレンジでもあった。ここでは初期の5作品を取り上げる。

ドキュメンタリー

『人間、そのたくましきもの』

斯塔ートして4年目のローカル局のこと。自社制作はフィルム構成によるドキュメンタリー番組に重点を置く以外にない。年がら年中、広島において被爆者の生活を見たり、声を聞けることが唯一の強味だった。

もともと私は被爆翌年の21年から中国新聞の記者として市政を担当、被爆者とともにその苦しみを見続けってきた。当時広島の郊外にあつた広島戦災児育成所(山下義信所長)を取材のためよく訪ねた。70人の原爆孤児が育てられていたが、その中の5人が父母の冥福を祈るために得度し



『人間、そのたくましきもの』川井秀夫さん一家

一家の生活を素直に描き、はじめての作品『広島に生きる』(30分番組)を作り上げた。

その後川井さん夫婦に大きな波紋が起きた。澄子さんが2人目の子を妊娠したのだ。原爆症の不安を抱えて彼女は一旦は中絶を決意したが、一人ぼっちの子の寂しさを知る秀夫さんが説得を繰り返し、やつと生む覚悟を決めた。杉原らは彼女から生まれ出る小さな生命を追って撮影を再開した。

広島の病院で彼女は貧血に苦しみながら女の赤ちゃんを生んだ。

「かたわではありますんか」とすぐ尋ねる澄子さん。「かたわではありますんよ」、医師が答える。その瞬間に彼女の両眼から涙が溢れ落ちる。すばらしいシーンだった。この番組は『生まれる』(30分)として制作された。

1年6か月にわたった撮影でフィルムは1万7000フィートにのぼった。この一家を追った二つの番組をもう一度見つめ直してみたい。あらためて構成を映画監督の松山善三さんにお願いした。試写を見た松山さんの口添えもあり、高峰秀子さんがテレビでは初のナレーションを引き受けてくれた。

タイトルも新しく『人間、そのた

くましきもの』(45分)と名付けられ、番組も大きく生まれ変わった。私にとつて初の芸術祭参加番組はフジテレビ系列で放送された。

番組のクライマックス「赤ちゃんよすこやかであれすくすくと育て」という高峰さんのナレーションは、地元では被爆の母と子におくる強い応援歌になつた。「番組の赤ちゃんを抱かせて欲しい」と訪ねてくる女性が後を絶たなかつた。

セミ・ドキュメンタリー

『百日紅(さるすべり)の花』

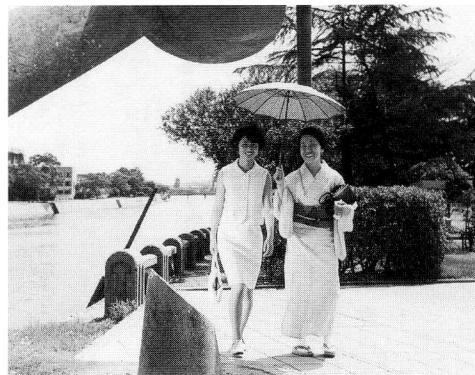
昭和42年度芸術祭奨励賞

第8回放送作家協会最優秀番組賞

2回目の芸術祭参加はドキュメンタリードラマ『百日紅の花』にはやばやと決まった。『ローカル局ではドラマは作れない』といわれた民放の詩人栗原貞子さんが発表した詩の一節を引用する。

『生ましめんかな』である。詩の一部を引用する。

「うめいていた重傷者だ。かくてくらがりの地獄の底で新しい生命は生まれた。かくてあかつきを待たず産婆は血まみれのまま死んだ。私が命捨てとも己が命捨てともこの詩は本当にあつた出来事といわれて感動を呼んだ。これをドキュメンタリードラマに作れないか。取材をはじめて間もなく広島市に住むその母子、平野美貴子さんと娘の和子さんを探し出した。和子さんは21歳、短大を出て洋裁学校に通っていた。こんどは最初からスタッフを決めた。制作小川博、脚本、監修を松山善二、演出杉原萌、撮影竹村峰信、尾川邦治らを中心にして準備にかかりた。制作小川博、脚本、監修を松山善二、演出杉原萌、撮影竹村峰信、尾川邦治らを中心にして準備にかかりた。広島の母を演ずるのはこの人以外にはないと、地元出身の大女優杉村春子さんに出演交渉をはじめた。だが、ドラマをはじめて制作するというローカル局に不安を抱いてか、なかなか返事が貰えない。そこで『人間そのたくましきもの』を見てもらつたところたちまちにしてOK。娘役には広島の女性を起用することにし、偶然にも広島女子大の一年生木村光江さんを見つけ出した。詩の朗読は高峰秀子。



『百日紅の花』右、杉村さん 左、木村さん

松山さんは2回も広島へ取材にきて脚本が出来あがつた。
物語は広島でたくましく生活する三波八重（杉村）とその娘紅子（木村）を中心いて被爆女性の心を描いた。

紅子には恋人がいて求婚されるが、被爆女性が流産したことを知つてから悩みがはじまる。結婚しても子供が生めないのでないか。紅子はあの原爆の夜生まれた娘だつた。彼女は希望を失つて家出するが、母から生きることの尊さを教えられて恋人のもとへ飛び込んで行く。

ところが娘役の木村はズブの素人、見かねて高峰秀子さんが東京の自宅で特訓を引き受けてくれた。

他の出演者も文学座から五人、詩

の朗読の高峰さん以外は幼稚園児、先生、医者、看護婦、被爆者など約20人がすべて素人というローカル局ならではの配役。テレビ局側のスタッフも約10人。照明、録音は外注。

22年目の原爆の日を前に7月中旬、

広島でクリンク・イン。連日30度を超す猛暑の中で撮影は進んだ。平和公園近くの民家をそつくり借り上げて庭にはイメージの百日紅の花を咲かせた。市内ではメツキ工場、産院などを借り、原爆の夜の出産シーンは袋町小学校の被爆したまま残されていた地下室を使った。

8月6日は平和公園、祈念式典、夜の灯籠流しがそのまま舞台。多くの遺族たちに混つてぶつつけ本番で杉村さんは平和公園近くの実家で少女時代を過しただけに地元のファンも多く盛んに激励の言葉をかけられて感激したという。

『百日紅の花』は広島テレビ開局5周年記念を兼ねて芸術祭に参加、15番組のトップを切つて日本テレビ系列17局に放送された。

後日談がある。木村はその後松竹映画の中村登監督から出演の誘いがあり、「生ましめんかな」で赤ん坊を取り上げた産婆の三村ウメヨさんは

奇蹟的に生き延びていて、平野さん母子と平和公園で再会、手を取り合つて喜んだそうだ。

音楽ドキュメンタリー 『朝顔』

昭和43年度芸術祭奨励賞

1969年スペイン・オンドラス賞

8月6日の広島は肉親を被爆で失つた遺族や被爆者たちの平和の祈りに包まれる。その姿を映像で見せ、そこから広島の悲しみ、怒りを感じてもらうのが最もよい表現ではないか。音楽は日本人の血の中を流れている邦楽の交響楽を作つてはどうか。前代未聞の邦楽ドキュメンタリーに挑戦することにした。

邦楽界の当時の長老今藤長十郎、藤舎呂船のご両人を構成の松山善三さんと東京に訪ねてお願いした。「邦楽界でもはじめての試みです。各流派の人たちと相談してみます」とはじめは慎重だったがしばらくして回答がきた。各流派を超えて協力し、最高のメンバーを揃えるということで、早速、交響楽（四楽章）の作曲がはじまった。

昭和43年8月6日午前4時、松山さん、広島テレビの演出杉原萌などスタッフ約30人が撮影に集合した。とりわけカメラマンは岡田宗之助、

竹村峰信、三浦克己、河内英助、尾川邦治、太地徹などを総動員し、10

台のカメラがそれぞれ撮影現場へ向

った。平和公園を中心に慰靈碑、供

養塔、ドーム、原爆病院、火葬地跡、

埋葬地、瀬戸内海など約100ヶ所。

この日撮ったフィルムは約2万フィ

ート。すでに被爆当時の写真も国

内外から集めていた。

邦樂交響楽の録音は東京の東芝音楽工業の大スタジオで行なつたが、これがまた大変。長十郎、呂船の両長老を中心には作曲の4人、演奏は指揮の清元梅吉をはじめ32人、独唱、合唱16人、総勢48人が次々に顔を揃えた。

第一樂章 受難 作曲杵屋巳太郎

瀬戸内海、広島の夜明けからはじまり、現在の平和な風景と23年前に壊滅した姿を交互に見せながら受難の日とその思いをつづる。時刻は5時から8時14分までを描く。

音楽は主に琴、尺八を用いて島々の美しい夜明けと広島のなごやかな朝を奏でる。他に三味線と合唱。琴の宮崎富美代と米川敏子という二大奏者の共演が実現した。

第二樂章 地獄 藤舍堆峰

原爆投下。一瞬のうちに街は崩壊し燃え上つた。多くの爆死者は倒れ、全身火傷の重傷者は水を求めて川へ

殺到し地獄となつた。時刻は8時15分。

音楽は打楽器、小鼓を中心にして激しく、いつづみの音で凄惨な地獄を表現。

その他尺八、能管、三味線、十七絃、琴を使用。

第三樂章 怒り 作曲常磐津文字

兵衛 平和公園の多くの慰靈碑には遺族の祈りが続く。祈りは悲しみに、激しい怒りに変わる。時刻は無限。

沈潜する怒りを表現する。なかでも

三味線を主体に、被爆者的心に深く

音楽は太棹、中棹、地唄、細棹の

義太夫三味線の竹沢弥七と長唄三味

線の名手杵屋五三助の掛け合いは二度とないといわれた。

第四樂章 鎮魂 作曲今藤政太郎

夏「75年は草木も生えない」といわれた爆心地の一隅に咲いた朝顔の花から名づけられた。

また番組には、はじめに木島則夫

の約60秒の解説だけがつけられた。

明治百年記念芸術祭に参加、日本

テレビから系列19社に放送された。

音楽は世界の言葉。英語版を制作し遠くスペインのオンドラス賞コンクールに参加、異国のテレビ界に邦樂交響楽を鳴り響かせた。

ドキュメンタリー『ある夏の記録』

昭和42年度民放連監賞報道社会

番組金賞

1968年イタリア賞20周年記念特別賞



『朝顔』 原爆ドーム

全樂章を通じて長十郎が監修

夜に入ると爆心地を流れる元安川

で死者の靈を送る灯籠流しが行なわれる。午後10時広島の夜は終わる。

音楽は被爆詩人峠三吉の詩『人間

を返せ』から取り、観世栄夫、今藤

文字の独唱から合唱へ広がる。三味

線、琴、尺八、笛、打楽器などすべ

ての邦樂器を用いる。

タイトルの『朝顔』は被爆の翌年

夏「75年は草木も生えない」といわ

れた爆心地の一隅に咲いた朝顔の花

から名づけられた。

また番組には、はじめに木島則夫

の約60秒の解説だけがつけられた。

明治百年記念芸術祭に参加、日本

テレビから系列19社に放送された。

音楽は世界の言葉。英語版を制作

し遠くスペインのオンドラス賞コン

クールに参加、異国のテレビ界に邦

樂交響楽を鳴り響かせた。

ままだった。

広島大学工学部の佐藤重夫教授の調査によると、焼けただれてもろくなつたレンガ塀にはいたるところに亀裂が走り、その長さは約30キロ。

保存工事は、全体を接着剤で固めるという結論だった。

地元局として工事のすべてを記録することにした。何せ小さなローカル局。すでに『百日紅の花』の制作準備を進めており人手が足りない。報道記者寺本宏身とカメラマン三浦克己の二人を担当として工事現場に貼りつけることにした。工事の過程を追うだけでは単なる科学番組になる。原爆病院に入院している被爆者の鬱病生活を合わせて追つてみるとした。

寺本と三浦は毎日のように工事現場に通い、原爆病院では患者や病院の承諾を得て撮影にかかった。ただし患者は固定しないで複数を選んだ。その中に最近入院したばかりの坪川和子さん(当時33歳)がいた。

炎天下、ドームのレンガ塀には30センチ間隔で約5000の穴があけられた。接着剤は最新のエボキシ樹脂、穴の一つ一つに総量12トンが注ぎ込まれる。

和子さんは小学生の頃被爆したが、至つて元気に成長。国鉄に勤める夫

と結婚、3人の女兒に恵まれ幸せな5人暮らしだった。入院から一ヶ月

後に胃ガンの手術を受け、ひとまず成功したと思われたが、病魔は深く食い込んでいた。

その頃、市役所では工事費の財源が問題になつた。エボキシ樹脂はセメントの200倍という高価な代物である。浜井信三市長が街頭に立つて募金を呼びかけたところ反響は大きく全国から募金が送られてきた。

4ヶ月にわたつた工事が終つたのは、祈念式典直前の8月5日。亀裂のすみずみまで化粧し新しい鉄筋で支えられたドームは面映ゆい表情を見せていた。

和子さんの病状が悪化したのは7月下旬。医師の手厚い治療が続いたが、8月10日夜、夫や娘に看取られて短い生涯を終えた。病院では、撮影の間に27人も亡くなつていた。番組は構成松山善二、ナレーショ

ン高峰秀子で一応出来上つた。このまま放送してよいものだろ

うか。遺族や原爆病院の重藤文夫院長にも見て頂き意見をうかがつた。

重藤院長は「もし批判が出れば私が説明します」とまで言われた。院長も被爆者の一人だった。

翌年の全国民放大会では民放連盟賞報道社会番組の金賞に選ばれた。英語版も作り、世界のテレビ界で高い権威を持つイタリア賞コンクールに参加、20周年記念特別賞を受けた。

全国からの募金は、130万人、6000万円にのぼり、市の予定額



『ある夏の記録』坪川和子さんの葬儀

して58万円が送られてきた。そのうち20万円は原爆病院に寄付、広島テレビが志を残額に添えて45万円を3人の遺児の教育資金として成長するまで銀行に寄託した。

トキュメンタリー

一石（いしゐ）

昭和44年度芸術祭優秀賞

昭和4年二月八日實錄
の三支ノアラノノ首

和公園の本川沿い

第一中学校の大きな慰靈碑が立つ

てある。あの朝爆心から500メートルの地点で爆震

トルの地点で被爆した1年生322人と先生4人の靈が眠っている。

『碑』の企画を提案したのは報道

制作部長の薄田純一郎だつた。被爆
して五年生が入社するのを見し乍ら、

しかし1年生が万学するのと万れ違いに卒業した先輩だった。専門学校に

入り、広島市から約35キロ離れた大

竹市の軍需工場に動員されていた。
彼の加わせを聞いて、三島寅の実家

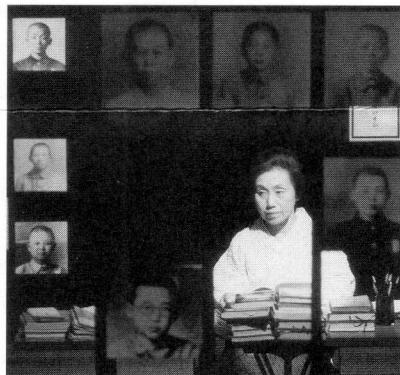
被爆の知らせを聞いて広島市の実家に歩いて深夜たどり着いた。

市街は壊滅し盛んに燃えていた。

多くの死者、負傷者が倒れており、原爆地獄をかこ見て一見ざつ。

廐焼地獄をしかい見たモノが少なかつた
彼は「碑」を思い立つと遺族全員

に調査書を発送し回答を求めた。直
接聞き取りにも出かけた。約半年か
かつて226人から返信がきたが、



『碑』 少年たちのパネルと杉村春子さん

撮影竹村峰信、演出杉原萌ですぐに制作にかかった。

古代の伝承に重要な役割を果たした語り部を現代に登場させる構成である。東洋工業（現マツダ）にある大スタジオを借りた。遺族から送られてきた少年たち一人一人の顔写真

成4年退社。大正13年生。

広島テレビ創設に参加。編成、営業、報道制作、営業局長などを歴任し専務。平

復讐の話文新聞 25年 話文記者として壇滅した広島の復興を眼前に見る。37年、

筆者略歴 昭和21年、中国新聞入社、
後二歳毛利門。7三、
毛利門記者二之二

(写真提供 尾川邦治氏)

テレビ番組に収容しきれなかつた
ほう大な調査資料が薄田の手元に残
つたが、彼はそのすべてを一冊の本
にまとめた。『碑』はポプラ社から
出版され今も多くの生徒に読まれて
いる。

番組は芸術祭に参加、日本テレビ系列23局にネットされた。系列外からも要望があつて、国内では44局で放送。海外からも希望があり、デンマーク、スイスのテレビ局でも放送された。たちのパネルが崩れ落ちる。息を飲む一瞬だった。

をパネルに作成、舞台の背景に掲げた。その真ん中で広島の母に代わつて杉村さんが切々と語り続けた。そして語り終わつた瞬間に背後の少年